

異和の体

岸田國士「牛山ホテル」論

坂本彩香

序章

劇作家・小説家として活躍した岸田國士は、一九二九（昭和四）年一月、『中央公論』に「牛山ホテル」を発表した。フランス領インドシナを舞台にとり、いわゆる「からゆきさん」を主要人物にするという、岸田作品の中でも異例の設定であった。せりふの大半が、精緻な天草の方言で書かれていたため、読者から読みづらいとの指摘を受け、一九三二（昭和七）年に「別稿牛山ホテル」として改稿される。最初の上演は、岸田國士自身が演出した築地座公演（一九三二年六月二五日・二六日）であった。^②岸田は、この作品の執筆背景を次のように述べる。

「牛山ホテル」は、昭和三年の秋に、ふと、当り前の戯曲を書いてみようと思ひ、それまではわざと避けてゐた「筋」を織り込み、自分の経験と現実の印象を基礎として、客観的な主題の取扱ひ方を試みてみた。^③

ここで重要なのは、「自分の経験と現実の印象を基礎として」^④いることである。本作品は、舞台となったフランス領インドシナに実際に岸田が滞在し、当時の体験をもとに執筆された。したがって、他の諸作と比較しても、「いちばんリアリスティックに書かれている」のである。^⑤

岸田がフランスの植民地であったインドシナへと渡つたのは、一九一九（大正八）年のこと。フランス演劇を学ぶために渡仏を試みたが、旅費不足のためまず香港へと向かった。当地で三井物産フランス領インドシナ出張所長の仏語通訳の職を得、ハイフォンへ赴く。同地に三カ月間滞在することになり、このハイフォンで過ごした体験を「牛山ホテル」の素材とした。後に、「この東洋の植民地における日本人の生活の印象は、私の脳裡に深く刻みつけられた」と述懐しているように、岸田は現地に暮らす日本人に目を向け、写實的に描き出したのである。本稿では、まず「牛山ホテル」が、植民地空間における日本人を精緻に描いているという特徴をもっていることに着目した

い。今村忠純は、これまでの研究でこのような特徴が突きつめて論じられてこなかったと言う。

印度支那（東洋）でありながらフランス領（西洋）、植民地であり、そこに東洋の日本人が流れてきてフランス語をもちい、アナミット（安南人）を手足のようにつかってくらしている「此の土地」に、日本人のくりひろげるその光景の異様さこそが、疑われるべきなのだった。「牛山ホテル」という作品が不幸だったのは、そのような側面に目とどいていなかったからである。⁶⁾

そんな今村も、「植民地の生活からさ」という日本人をどうしても解放してやらねばならぬということ、そこにこの「牛山ホテル」の「主題」がなければならなかった」と続けていき、「異様さ」を追究しないままに、登場人物のさとの「解放」という結論へと急いでいる。本稿では、植民地へと流れていった日本人、とりわけ「からゆきさん」たちが身にまとうこの「異様さ」に焦点を当てて、「牛山ホテル」を読み直すこととする。

岸田が「所謂海外出稼の天草女を主要人物として、その生活を描いてみた⁷⁾」と言うように、海外出稼ぎ女性の象徴とも言える「からゆきさん」は、本作品の中で重要な位置にある。「今更国なんぞに戻つて、苦勞する氣にやらん」と語る「からゆきさん」にとっての「国」とは何か。また、難解な天草弁の使

用にはどのような効果があるのだろうか。岸田は、「植民地といへば、特にこの地方の日本人コロニーに一種独特の色彩を添へるものは、いはゆる娘子軍の地方訛りであつて、そこに作者は捨て難い興味を感じた⁸⁾」と書き残している。

「望郷の念をもたない人物は、「からゆきさん」だけではない。「僕は無論 思想的にも、感情的にも、一個のコスモポリタンです」と語る男もまた、「国」との関係に一種の軋みを抱えていると読み取れるだろう。ことに、故国（故郷）を離れて多（他）民族が雑居する場へと渡った人は、「望郷」観念に集約され表象されがちだが、「牛山ホテル」はそのような立場と距離を取っているのである。雑居的空間に暮らす日本人たちの「異様さ」を注視することによって、国家との間に「異和」を抱えながら生きる人々を描く「牛山ホテル」の意義を明らかにしていきたい。

一 「牛山ホテル」周辺

「港に近く、仏国人の住宅地と、所謂「アナミット」の部落とに接する一區画、その中心にある日本人経営のホテル」が牛山ホテルで、「牛山ホテル」の作品空間はこのホテルから抜けない。

登場人物は、ホテルの女将である牛山よね、その養女のとみ、S商会出張所の旧主任真壁の妾である藤木さと、フランス



フランス領インドシナのからゆきさん〔絵はがき〕

(青木澄夫氏提供)

下部には、「225 B. Tonkin-Femmes Japonaises habitant le Tonkin
(トンキンに住む日本人女性たち)」と記されている。

人の妾の石倉やす。これら「からゆきさん」たちに加え、真壁や、彼と同じS商会社員の^{おととろ}鵜瀬と島内、金田洋行の金田、写真師の岡、剣道教師の納富といった日本人たちである。彼らは、フランス領インドシナの共通語であるフランス語を用いて「アナミツ」(土人)と「支那人」を使い、牛山ホテルをたまり場としている。そこに、S商会出張所の新主任として三谷とその妻が日本からやってくる。植民地空間に慣れない三谷夫妻と

交代するよう
にして、妾の
さは日本へ
帰るためにホ
テルを去って
いく。さを
中心人物とし
て、「みんな
少しづつ日本
人でなくなっ
て」いく「根
なし草」の感
覚が描写され
るのである。
「牛山ホテ
ル」の舞台は、

フランス領インドシナのハイフオンに実際にあった「石山ホテル」である。⁽⁹⁾ 港湾都市であり、サイゴンやシンガポールとともに船舶の重要な寄港地であったハイフオンの地で、岸田はホテルという空間とそこに集まる日本人たち、とりわけ「からゆきさん」に目を向けたのである。

「からゆきさん」とは、売春業者と女衞によって海外に売り飛ばされた女性の総称である。もとは「唐行き」の意味でふるさとの人々がそう呼んでいたが、それ以外の人々は「醜業婦」「娘子軍」「密航婦」などとさげすんだ。広義には、娼婦だけでなく妾も含まれる。「からゆきさん」の多くは女衞による誘拐だが、自発的になる者、借金のために身売りする者も少なくなかった。一八九六年四月に公布された「移民保護法」は、売春業者および娼婦の渡航を認めていなかったにもかかわらず、朝鮮と清国は適用外としていたため、ここを拠点に世界各地へ散らばっていった。「からゆきさん」は、彼女らに付随して日本の小売商、それに続き貿易商や商社などの大企業が進出していったことから、南洋進出の開拓者という捉え方もされる。⁽¹¹⁾

「からゆきさん」には種々の名称があるが、その中に「天草女」というものもある。「天草女」と「からゆきさん」のイメージが呼応しているのは、「からゆきさん」の中で天草出身者が多かったからである。それだけでなく、「天草」が孕む周縁性も密接に関係しているだろう。天草島は劣悪な土地条件、雇用機会の不足による寒村として知られており、なかでも深刻であつ

たのが「みだれおし」(人口過剰)である。

日本各地では過剰人口に対して間引きの風習がおこなわれていたが、天草では墮胎や殺児の風習がなかった。⁽¹²⁾一説には、島原の乱による人口激減がその理由とされているが、⁽¹³⁾いずれにしても、干拓事業と並行して、島外へと脱出する者が多かったことは事実である。水溜真由美によれば、天草の人々には「古くから出稼ぎの伝統があり、異郷に赴くことへの抵抗感が少なかった」⁽¹⁴⁾とされている。「農業を生業とし自己完結的な共同体の内部でのみ緊密な人間関係を形成した人々」⁽¹⁵⁾とは、心性を異にしていたのである。

また天草では、海外渡航者が多かった。人口過剰に圧迫され、また出稼ぎのため、「異国へ出稼ぐことを親の代、いや先祖からの家風やしきたりのように思い込んでいる」⁽¹⁶⁾人々が、海外へと渡っていった。

では、実際に海を渡り、多(他)民族が雑居する空間へと流出していった人々には、どのような人々がいたのだろうか。

一九一二(明治四五、大正元)年のフランス領インドシナへの邦人移民者は二二人で、⁽¹⁷⁾岸田が訪れた当時、ハイフォンには五三人の日本人(うち男性七人、女性四六人)が在住していたと記録されている。⁽¹⁸⁾ただし、密航者や「からゆきさん」が調査には含まれていない可能性が高く、正確な人数はわからない。

ハイフォンの地では、保田洋行(保田秋之助)、池田洋行(池田茂)、長島洋行(長島薫)などの「雑貨商」が存在し、石山ホ

テル(石山ユキ)や娼館(高梨峯吉)が散在していた。⁽¹⁹⁾雑貨販売店が多く見られる理由は、「娼婦たちに寄生するかたちで流出していった男性によって、彼女たちを相手とする「雑貨商」がまず生まれ」⁽²⁰⁾る傾向にあったからだと柏木卓司は述べている。

高梨峯吉が経営する娼館には、熊本出身の夫人と一四、五人の「からゆきさん」がいた。日本の娼館の中には、「仏国の官憲から衛生上日本人女郎屋が一軒欲しいとの交渉を受けて」⁽²¹⁾開かれたものもある。柏木はフランス領インドシナに「からゆきさん」が進出した最初の動機として、「明治十年代フランスの北部ベトナム侵略の際、その遠征兵を相手にする目的をもって送りこまれた」⁽²²⁾ことを指摘している。しかし、海外各地で起こっていた廃娼運動の影響で、一九二三(大正一二)年四月にフランス領インドシナ全域の日本娼館は撤廃を強いられた。

実際に石山ホテルを訪れた中野実には、「ホテルと云つても、二階建の、小ぢんまりとしたフランス風の洋館で、青い蔦草のまっはりついた白い門のあるところなど、落ちついたなかにも異国情調的」⁽²³⁾と記している。他にも石山ホテルは、紀行文や南洋調査報告書などに散見される。田村秋子は「なんかペンキ塗りの古ぼけた周りの雰囲気も繁華街でもなんでもないんですよ。原っぱの中に建っているような妙な建物でしたよ」⁽²⁴⁾と、中野実とは正反対の回想を残している。

石山ホテル女将の石山ユキは、天草出身の「からゆきさん」であった。田澤震五は、「四十を越して居るが、矢張り年相応

に見えてでつぷり太った女である。此のお雪さんは女でこそあれ仲々気の強い性質⁽²⁵⁾」と記しているし、安藤盛は『南支那と印度支那』(台湾新聞社、一九二三年)のなかで、「旅行者等に対して全身の苦勞を惜しまず世話をするし旅費の足らぬ時などは宿に泊めた上旅費もくれてやると云ふ氣まぐれ者」(二四二頁)と書いている。「外地」のホテルを切り盛りする逞しい親分肌の人物であつたらしく、「牛山ホテル」の女将牛山よねにもいくらかは面影をしのばせたであらうと思われる。

二 「望郷」 観念の再考

台湾総督府囑託の肩書きで東南アジアを視察した田澤震五は、テルナテ島を去る際の在留邦人との別れの場景を、「別れに臨み始めは帽子やハンカチを振つて居たが、(……)何時の間に用意したものか、手に手に日章旗を空高く差し上げて、棧橋上から盛んに振りまわし別離の情を惜んで呉れた⁽²⁶⁾」と記している。

在留邦人たちは「みんな大変な愛国者」であり、「天長節や、元旦には、総領事館へ、晴れの紋付着物を着て、人力車で乗りつけて、欣然と参賀拝賀をする⁽²⁷⁾」との記録もある。同国出身者の共同体を重んじて日本人会をつくる人々、現地で日本の歌を聴く人々など、紀行文に写された異国の日本人は、一般的に「望郷の念」「祖国への恋情」を胸に抱いた人々として描かれる

ことが多い。

このような放浪の愛国者たちは小説にも表現されている。台湾新聞社に勤めた後、海賊や海外在住の日本人の生活に迫り、その実態を描いた作家・安藤盛の小説「祖国を招く人々」と「あの人たち」の二作品を見ておこう。

まず、「牛山ホテル」と同じ一九二九年に、『騒人』七・八月号に発表された「祖国を招く人々⁽²⁸⁾」では、ホンガイの地に娼館を営み暮らす在留邦人たちの生活感情が描かれている。娼館にいる七人の「からゆきさん」は、「外国人の弄みもの^{みよまもの}」になりながら、「もう一度日本の美しい土を踏みたい、山を見たい」と日本から来た植民地研究者の「私」に言う。「私」は、

私といふ旅人をかうまでして歓迎するのは、それは私自身の肉体でなくて、私を通して彼女等の記憶から遠ざかり行く、故国を更に新に私の口を通して聞かうとする、一つの尊い気持ちからであることは判つてゐたが、私にしてもある涙ぐましい気持ちで、彼と彼女等の求めるがまゝ故国の便りを、ほの昏いランプの下で話して聞かせた。(七〇八頁)

と、悲哀の情を伴つて彼らの思いに応えるのであつた。

放浪の旅を続ける「からゆきさん」たちを、「私」は「哀れな群れ」と言う。出発の前に、ある女の墓参を頼まれた「私」は、「大老木の下にさゝやかな土饅頭一つぼつんと青草に埋められ



日本人墓地

(清水洋・平川均共著『からゆきさんと経済進出——世界経済のなかのシンガポール・日本関係史』モモンズ、1998年、P. 40)

しくてなりませんや」と叫ぶ在留邦人たちの姿が作中には一貫して織り込まれている。

一九二六（大正一五、昭和元）年、『大衆文芸』一二月号に発表された「あの人たち」⁽²⁹⁾は、「牛山ホテル」と同じく石山ホテルが舞台である。南洋旅行をしている新聞記者Aがホテルを訪れ、そこで出会った人々と天長節を祝う様子が描かれている。在留邦人たちは、一年に一度、働いて貯めたお金を懐に、幾日もかけて日本領事館のあるハイフォンへとやって来る。そして、日本人経営のホテルでその日を待つのである。領事館にて天長節を祝福する日本人は、次のように語られる。

「ある墓の前にする。それは、静かに日本を恋ひ慕つて逝つた未知の、放浪の女」の墓であつた。「妾たちの体はどうならうと、日本の為にさへなればそれでいゝのです」と言い、「日本へ堂々と手を振つて帰られる旦那が羨まらるゝ」とある。熱地を放浪する女たちが、揃つて裾模様の紋付姿で、三十人ばかりつゝましく壁にそつて立つてゐる。中には銀杏返しに結つた女もある。男たちは椅子に腰を下してゐた「……」誰れも彼れも厳肅な面もちをしてしぶき一つする者もなかつた。（二四一頁）

領事館からホテルに戻つた在留邦人たちは、ホテルの門に日章旗を立て、食堂で赤飯のおにぎりを食べながら破れた三味線を弾き、万歳と叫びながら宴会を始める。この植民地での祝賀会をAは、「内地のそれに比較して、云ひ知れない尊さ」と感じていた。日本の成人女性がどのような着物を着るのか知らないままに、「腰縫ひあげをした浴衣を、子供のやうに」着ている「からゆきさん」たちの「いぢらしい」身なり。「からゆきさん」の口からは、「日本が馬鹿に恋しくてならないの」と発せられ、「その心の内には、日本恋しさが一つばいに溢れて」いる。

「祖国を招く人々」と「あの人たち」は、南洋の地に一時滞在者として日本から渡航してきた男が、植民地を彷徨う放浪者の「日本恋しさ」に直面し、惜しまれながらもその地を去っていくという構造をもっている。

どちらの作品にも、日本を望む在留邦人が執拗に描かれているが、「ふるさと」を懐かしむような望郷心は見出せない。あ

るのは、ひたすらに日本（国家）を慕う感情である。「からゆきさん」にとって唯一の帰属場所が、国家に回収されているのである。

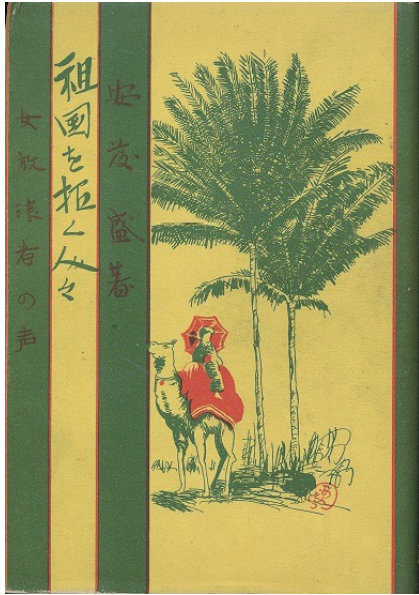
さて、安藤盛の作品では日本国を渴望する日本人の、とりわけ「からゆきさん」の姿が表わされていたわけだが、「牛山ホテル」ではどうであろうか。S商会の主任となる以前はロシア大使館で副領事をしていた真壁は、「僕は無論、思想的にも、感情的にも、一個のコスモポリタンです」と断言している。一つの国家に属するといった意識にはとらわれていないばかりか、「日本人」としての意識さえ疑っている。それは、歓送迎会での次の会話に示されている。

三谷。さつき家内とも話したんですが、かうしてゐると、丸で日本にゐるやうですね。日本にゐて、少し変つたことをしてゐるやうな気がしますよ。

真壁。君が一人で来たら、さうでもないんだよ。君達御夫婦を除いて、どれもこれも、内地にゐさうな人間は一人だつてゐやしない。みんな少しづつ日本人でなくなつてゐるよ。（三三頁）

日本人の集まりに、異国ではなく日本にいるようだと言ふは感じる。日本から来たばかりの三谷夫妻と、植民地に住み着いた者たちとの間で感覚のズレが生じているのである。真壁はもはや「日本人」ではなくなつてきている自分たちを認識する。すでに「望郷」の対象を喪失し、日本に帰属するナショナルな意識が解体されているのである。

「牛山ホテル」の中の「からゆきさん」にも、望郷心は見られない。もちろん、天草の方言を用いていることや、真壁の妾であるさとが過去を語る時、それは生まれ育つた村であり父を想起するものであることなどから、「ふるさと」に帰属している思いはある。しかし、「からゆきさん」と「ふるさと」を望郷という観念で結ぶことはできない。フランス人の妾であるやすは、「わしや、今ん男と別れたら、また八号にでんごろごろしとつて、代りのムツシュウ・フランセばつかまゆつたい。今更国なんぞに戻つて、苦勞する氣にやならん」と語っている。



安藤盛『祖国を招く人々』表紙
装画も安藤の手によるもの。

八号とは娼館であり、やすは今のフランス人と別れても新しいフランス人を見つけて、国には帰らない意思を示しているのである。

また、さとは年奉公がとけて天草に帰れる状況にあるが、「国へ帰ることを、それほど悦んでゐない」。寒村で暮らす酒飲みの父親のもとへ、「醜業婦」という烙印を背負って帰ることは苦痛ではない。

これら登場人物たちの「望郷」観念は、安藤盛作品の人物たちのそれとは明らかに異なっている。「牛山ホテル」の中にも、疑いもなく日本を想起する人物はいる。剣道教師の納富である。納富は、おそらく明治二〇年代後半に「国家百年の計を立つる精神」を背負ってフランス領インドシナに渡り、模範農場の経営と農作指導をおこなった。明治期「南進論」を背景に越境した者と言える。しかし、「海外放浪者の特徴」をもつ納富に日本を求める意識はない。水溜真由美のことばに従えば、日本であれ「ふるさと」であれ、そこへの「回帰の思想」は、「ふるさと」からはじき出されたマイノリティーに安らぎをもたらすものではない⁽³⁰⁾のである。

「牛山ホテル」の人物たちは必ずしも全員がマイノリティーとは言えないが、「からゆきさん」に関して言えば、彼女たちが一般的な「からゆきさん」表象から逸脱している点は重要であろう。「牛山ホテル」の評価は、このように同時代のステレオタイプ化された「望郷」観念との差異をふまえて検討されね

ばならないのである。

三 「ふるさと」か「国家」か

岩本由輝は「故郷」としても別に決まった概念があるわけではない。離郷した人間がそれぞれの境遇からさまざまな故郷のイメージをつくり出す。「……」それぞれの有するイメージが増幅されるなかで、あたかも万人に共通するような故郷ができあがる⁽³¹⁾と述べている。

また成田龍一は、離郷という空間的・時間的移動によって「故郷」はつくられるのだが、国家との関係性なくして「故郷」は成立し得ないと言う。成田は、「故郷」がすでにあって国家を発見するという過程ではなく、「故郷」の営みに先行して、ネーションの営みがすでにある⁽³²⁾と説いている。つまり、「地域を「故郷」たらしめるため」には、「ネーションの意識が前提」となっていないなければならないのである。

しかし、こういった見解は「牛山ホテル」の「からゆきさん」に当て嵌まるだろうか。成田は「故郷」は国家概念によって立ち上げられ、「故郷」と国家が公共性において、連結されるとともに「……」「故郷」・国家に回収される「国民が創出されると論じるが、「牛山ホテル」の「からゆきさん」が語る「ふるさと」は、日本（国家）を前提としているようには見えない。「からゆきさん」について森崎和江は、「明治のころにふるさ

とを出たからゆきさんには、いまの日本人のようなクニの観念はなかった。ふるさとがあるばかりで、海のむこうは唐天竺だった⁽³³⁾と述べている。そもそも「辺境の民」であった彼女たちに、国家も「故郷」概念もない。そのような近代の産物とは隔たった、自身の生まれ育った記憶の中の空間、視界の範囲で眺められた土地としての「ふるさと」だけしかなかった。

では、「牛山ホテル」の「からゆきさん」は、どのように「ふるさと」と日本（国家）を語っているのだろうか。「ふるさと」を想起する要素としては、まず天草弁が挙げられるだろう。天草の方言からは、「からゆきさん」の背景、ときに国策としての棄民を生み出さねばならなかった天草の周縁性を含んだ「ふるさと」が聞こえてくる。

真壁。お前の国の方では、女ばかり働いて、男は遊んでるんぢやないか。

さと。わしが、国にをるときや、男でん女でん、遊ぶどるもんなんぞ見たこたなかつた。まあ、遊ぶどると云へば、子供ぐりやんもんだ。^(二五頁)

「国」にいた時の記憶を語ることと、「ふるさと」の天草が浮かび上がってくる。真壁のせりふにある「お前の国」という箇所を見れば、ここで言う「国」が天草を指していることは明らかだ。先に引用した「今更国なんぞに戻つて、苦勞する氣にや

ならん」のように、彼女たちが発する「国」はすべて、天草を意味しているのである。

方言をせりふに用いたことについて岸田は、方言の蔭に「人物の生活が、気性が、趣味が、習慣が、特殊なニュアンスとなつて潜んでゐる」⁽³⁴⁾からだと述べている。

一方、やすの「自分の国の言葉は使はでん居つて見るな、あんな、どぎやんあつて思ふ。君が代だいろなんだいろ、歌はうごつなるばい」というせりふに表われているように、日本の国歌「君が代」は、「自分の国の言葉」を代補するものとして認識されているのである。放浪の地で「ふるさと」のことは奪い取る「君が代」。「からゆきさん」たちにとつての「日本（語）」とは、擬制としての「ふるさと」であった。

しかし、これは明確に意識化されているわけではない。「からゆきさん」は、国家を介して出国（出郷）した移民や出稼ぎではなかった。水溜が指摘するように、「からゆきさん」たちは「単身で、しかもしばしば非合法的に異国に赴いたために」、当時においては「例外的に」、「国家という障壁を媒介することなく「異族」と関わり得る存在だった⁽³⁵⁾」のである。

だがそれは、完全に「日本」から自由になったことを意味しない。国家を媒介せずに離郷したもの、他者によつて「日本人」を背負わされ、森崎の言うように「無国籍な状態のからゆきさんたちが、日本の女としてみられ⁽³⁶⁾」始めるという事実も確かに存在したのである。異国の人々、あるいは近代国家を抛

り所としている同国人が発する「国家」を回避することは、極めて困難であつただろう。

しかしながら、「牛山ホテル」の「からゆきさん」は日本（国家）から無縁でないにせよ、そのような意識を基盤とはしていない。安藤盛作品で確認した、村落共同体への帰属意識が近代国家に奪われてしまった人物とは異なり、伝統的な「我郷」が存在するのである。国歌を口にするも、やはり「君が代がなんかない」と言つて国歌（日本語）が所詮は天草弁の間に合わせでしかないことを意識している。また、さとの回想する「ふるさと」は、成田龍一の言う国家を前提とするような「故郷」ではない。近代国民国家によつて生み出された「からゆきさん」たちに、その国家を乗り越える可能性があるとすれば、それは、彼女たちが天草弁で「ふるさと」を語るそのことばそのものの中にあると言えるだろう。

四 異和の体の可能性

序章で引用した今村忠純の論述をいま一度思い出すならば、「牛山ホテル」の人物たちは日本人でありながら、フランスという西洋の植民地となつたインドシナに渡り、フランス語を用いて「土人」を使っている、その光景が「異様」だということであつた。これは、一九四〇（昭和一五）年にフランス領インドシナを日本軍が占領していった事実と無縁ではない。しかし

今村の言う「異様」さは、個人的な次元においてこそ際立つだろう。たとえば、前章で確認した「からゆきさん」の「ふるさと」と「日本」（国家）の関係がそれである。

「牛山ホテル」では、このような言語的・文化的混淆を「異和」ということばから考察したい。

山口昌男は『文化と両義性⁽³⁷⁾』において、「違」には同質のものとの微妙なちがいがあふ。「内側」に属するもののちがいである。これに対し「異」という文字には内と外の間にあるような帰属のちがいのニュアンスがある」と述べている。つまり、「違和」は「身体」というミクロコスモスに関わるような、「内部における差異」であるのに対し、「異和」は「外部性を表すもの」で、「一つの枠組の中で表現されるはずのないもの」ということである。

作中には、ホテルの中で形成される日本人コミュニティに度々、ユダヤ系フランス人のロオラが登場する。やすとロオラのフランス語の会話に注目してみる。

やす。アレ・ボワル・オ・ケエ。ムツシユウ・エ・ラ・ア

ベク・マダム・ウシヤマ。セ・セリユウ。

ロオラ。C'est pas vrai ! (五頁)

日本人やすにフランス語を語らせることで、他言語との混淆が読み取れるが、その表記が片仮名であるため、他言語を取り

込みながらも同化しない存在として、むしろ「異和」が強調される。まさに、混淆であって同化ではなく「異和」であるという現象を引き起こしているのである。

あるいは、天草から海を渡った「からゆきさん」と国家を媒介して越境した者との比較はどうだろうか。

さと。うちの父^{ちち}つあんてちやあ、あつでん、なかなか働き手ばな。たゞ、きばつてもなんにもならんだけたい、あゝた。

真壁。お前の話は、陰気臭くつていかんよ。働いたつてどうもならんなんてことがあるものか。働き方がわるいだけの話さ。下手に働くといふことは、働かないのと同じことだ。とは云ふがね。これは女には当てはまらない理屈だ。(二五頁)

さととは天草の寒村のことを語るばかりだが、真壁は天草という土地の辺境性を理解していない。同じ日本人でありながら、両者の間には異なる価値基準が働いているのである。また、登場人物たちの日本という国家に対する意識にも、「異和」が生じている。ナショナルな基盤をもち、「いざと云へば、これでも日本人です」と、「日本」が自らを語る記号となっている納富に対して、「からゆきさん」たちのように、そうした安定的な記号を持ち合わせておらず、「日本人」としての自己確証を

得ることができないような人物もいる。

このように多重的に描かれる「異和」は、無秩序でまとまりのない人物たちがそれぞれに抱えている、国家や言語との矛盾に満ちた関係を浮き彫りにさせる。片仮名表記のフランス語を話す日本人、「ふるさと」と「国家」の観念が分節化されていない「からゆきさん」、「牛山ホテル」の中で唯一日本を慕うが「海外放浪者の特徴」をもつ納富、コスモポリタニズムをうたう真壁。日本が共通の帰属場所となり得ず、矛盾を孕みながらそれぞれが個々の「国」意識をもっているのである。

文化人類学者の前山隆は、母国を離れた日本人には、「現実としての日本」がしだいに「イメージとしての日本」に昇華⁽³⁸⁾し、「しだいに、ますます日本人になっていく」感覚が生じるとしている。しかし、真壁はちがう。彼は、ますます日本人から遠ざかっていくと言う。国家を「自身の内にある勝手に美化された幻想」⁽³⁹⁾として肥大化させるのではなく、真壁も「からゆきさん」もむしろ幻想から断絶していると言うべきである。放浪者にとつて拠り所となり、時として団結へと導くはずの国家が、ここでは一切その効果を發揮することができないばかりか、人々の間に疎隔を生じさせる存在として描かれているのである。

国家の統合力を無効化したのは、「からゆきさん」の天草弁であった。植民地空間とも「日本」ともなじまないままに、宙づりされたことば。その天草弁が、国家や国語の優位性を機能

不全に陥れ、いかがわしさに満ちたものへと解体してしまう力は際立っている。「地方訛り」に「捨て難い興味を感じた」岸田は、彼女らに徹底して天草の方言を用いた。

「牛山ホテル」における天草弁の意味を、齋藤平はさとのアイデンティティに位置づけて、「本作品の主題は主人公「さと」や彼女を取り巻く人々の「人生」を描くことであり、その拠り所として「方言」が用いられたと考えて良からう。祖国を離れ、植民地で暮らす人々が自己を規定するのは祖国、就中、自身が生まれ育った土地のことに岸田はその背景をもたせようとしたのである⁽⁴⁰⁾」と述べている。しかし、たとえ岸田自身の意図がそうしたローカル・カラーの再現に向けられていたとしても、天草弁は「からゆきさん」の単なる存在証明としてあるだけではないのだ。「ふるさと」と分断され、異国に投げ出された彼女たちにとって、もはや「郷愁は自己疎外」（ジャン・アメリ）でしかなく、「自分の国の言葉」である天草弁が唯一の自己規定であった。しかし、天草弁という自己確証でさえ、異国では「からゆきさん」という表象へと彼女たちの身体を縛りつけ、さらに「からゆきさん」像を補強していったこともまた事実なのである。

天草弁が国家というもののいかがわしさを僅かながらも顕わにできたとすれば、それは「からゆきさん」たちが、すでにその国家によって消費し尽くされ、うち捨てられていたことの反証にすぎない。それはあまりに不条理な代償の上に、幽かに見

いだせるものであった。

終章

異国の地で「異和」を抱えた人々を描く「牛山ホテル」には、日本（国家）という母体を克服する可能性が読み取れるだろう。本稿では、日本（日本人）とは乖離し世界主義を掲げる真壁や、とくに、国家に異なりを示し天草弁を存在証明とする「からゆきさん」を見てきた。国家とは、離散者にとっての拠り所であり、同時にそうした浮遊する離散者を実体化させるものだ。作中人物たちは、このような国家に対して疑義を呈しているのである。

本作品は、五場すべて「日本人経営のホテル」で展開し、非常に狭い空間で構成されている。読む側としては、偏狭的な印象を受けることもあるが、この狭さが日本人コミュニティを鮮明に描き出しているのである。異なる階層の者がともに生きる姿、ホテルの中で独自の共同体を形成しながらも、それぞれの「異和」を内包する姿を通して、国語と方言、「国」に対する意識といった異なりをも明示している。植民地という雑多的空間において、こういった日本人を描ききったところに「牛山ホテル」の特徴はあった。

放浪する人物たちの身体は定まらない。「台湾・上海・西貢・新嘉坡……それと、こゝにもう今年で七年……」と言う鵜瀬は

植民地を渡り行き、真壁はフランス領インドシナを出てどこへ行くのかわからない。存在場所を彷徨わせ、流れる身体を生み出すものは、やはり国家である。また、主体のないままホテルを去ることは、国境を越えて日本（「ふるさと」）へ帰ろうとしている。国家を乗り越える可能性と、そこから脱することの不可能性。幾重にもかたちを変える国家に翻弄された離散者の重層的な生がそこに照らし出されているのである。

注

(1) 『浅間山』（白水社、一九三三年）所収。のちに『牛山ホテル』に改められる。主に天草弁が読みやすく改められたもので、プロットに大きな改変は見られない。なお、本稿では『中央公論』版初出を用いる。

(2) 飛行館講堂においての上演、舞台監督は伊藤基彦、装置は伊藤薫朔。この築地座公演には、「築地座は図らずも傑作を生んだ（……）舞台装置と俳優諸君の天草弁のコナシ方の巧さと相まつて、作者一流のデリケートな世界を見事に表出し尽した」（『東京朝日新聞』一九三二年六月二十九日朝刊）との評価もある。なお、伊藤薫朔による舞台装置図は「文化遺産オンライン」

<<http://bunka.nii.ac.jp/SearchDetail.do?heritagelId=251179>>

で閲覧可能。

(3) 「あとがき」（『風俗時評』鎌倉文庫、一九四七年）。引用は『岸田國士全集』二八卷（岩波書店、一九九二年）による。

(4) 伊賀山昌三「牛山ホテル」の異色」（『新劇』一九五四年六月号）
(5) 岸田國士「作者の言葉」（『日本現代戯曲集Ⅰ』新潮社、新潮文庫、一九五一年）。引用は前掲『岸田國士全集』二八卷による。

(6) 今村忠純「牛山ホテル」論」（『大妻国文』一九九五年三月号）
(7) 「せりふ」としての方言」（『悲劇喜劇』一九九九年三月号）。引用は『岸田國士全集』二二卷（岩波書店、一九九〇年）による。

(8) 前掲「あとがき」

(9) 岸田國士「前記」（『歲月』創元選書二二、創元社、一九四七年）に、「石山旅館」が舞台であることが記述されている。

(10) 宮岡謙二「娼婦——海外流浪記」（三一書房、三一新書、一九六八年、一六〇二〇頁）

(11) こうした捉え方は、通説として流布している。たとえば、矢野暢『前進』の系譜 日本南洋史観」（千倉書房、二〇〇九年、六二頁）。

『南進』の系譜の原書は中央公論社、中公新書、一九七五年。

(12) 北野典夫『天草海外発展史』上巻（葦書房、一九八五年、三一〇頁）
(13) 森克己『人身売買——海外出稼ぎ女』日本歴史新書（至文堂、一九五九年、一四〇二二頁）

(14) 水溜真由美「森崎和江「からゆきさん」をどう読むか」（『女性・戦争・人権』二〇〇二年二月号）

(15) 同前。

(16) 前掲『娼婦——海外流浪記』一八頁。

(17) 今野敏彦・藤崎康夫編『移民史Ⅱ』アジア・オセアニア編（新泉社、一九八五年、二五三頁）。同年のマレー、シンガポールへの移民者数三八六人と比較すると、少数である。この理由の一つは、

フランス政府による関税政策にある。日本商品に対しては最高の一般税率が適用され、日本人の自由な経済活動が封じられていた。

(18) 梶原保人『図南遊記』（民友社、一九一三年、三三二頁）。また、十蔵寺宗雄編『南洋案内』（東方書院、一九三二年、二一九頁）には、一九二八（昭和三）年現在でフランス領インドシナに二二八人、ハイフォンに五二二人の日本人が住んでいたとの記述がある。

(19) たとえば、柏木卓司「戦前期フランス領インドシナにおける邦人進出の形態——職業別人口表——を中心として」（『アジア経済』一九九〇年三月号）に、フランス領インドシナ在留邦人および商店の詳細が記されている。

(20) 同前。

(21) 田澤震五『南国見たままの記』（新高堂書店、一九二二年、三八三頁）。なお、田澤は当時の知識人としては珍しく「からゆきさん」を、「娘子軍たるや日本人の海外発展者に対し、或る意味に於ける開拓者或は恩人」（二四二頁）だと捉えていた。

(22) 柏木卓司「ベトナムのからゆきさん」（『歴史と人物』一九七九年一〇月号）

(23) 中野実『佛印縦走記』（大日本雄弁会講談社、一九四一年、三一頁）
(24) 矢代静一、田中千禾夫、原千代海、田村秋子、岸田今日子座談会「岸田先生を偲んで」（劇団NLT「岸田國士追悼一五周年記念公演」パンフレット、一九六八年一〇月）

(25) 前掲『南国見たままの記』三七七頁。

(26) 前掲『南国見たままの記』七四頁。

(27) 長谷川春子『南の処女地』（興亜日本社、一九四〇年、三五〜三六頁）

(28) 引用は安藤盛『祖国を招く人々』（先進社、一九三二年）による。本書は総ルビであったが、引用者が必要と認めたものを除きルビを省略した。また、安藤盛作品や安藤自身に関する情報は、青木澄夫「放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」」中部大学ブックシリーズ Acta12（中部大学、二〇〇九年）を参照した。

(29) 引用は前掲『祖国を招く人々』より。

(30) 前掲「森崎和江『からゆきさん』をどう読むか」

(31) 岩本由輝「故郷・離郷・異郷」（『岩波講座日本通史第一八巻近代三』岩波書店、一九九四年、一〇五頁）

(32) 成田龍一「故郷」という物語——都市空間の歴史学（吉川弘文館、一九九八年、九二頁）

(33) 森崎和江『からゆきさん』（朝日新聞社、一九七六年、二一三頁）

(34) 前掲「せりふ」としての方言。齋藤平は、「岸田國士「牛山ホテル」の方言について」（『皇学館大学文学部紀要』二〇〇一年二月号）において、方言によって、「その人物の生まれ育ちやその周辺のこと」を含んだ人間性そのものが「特殊なニュアンス」として醸し出される」と指摘している。

(35) 前掲「森崎和江『からゆきさん』をどう読むか」

(36) 前掲『からゆきさん』一五八頁。

(37) 山口昌男「文化と両義性」（岩波書店、岩波現代文庫、二〇〇〇年、まえがき四〜五頁）。単行本は一九七五年刊行。

(38) 前山隆「エスニシティとブラジル日系人——文化人類学的研究」（御茶の水書房、一九九六年、二〇七頁）

(39) 井上理恵「南方のものの言わぬ女たち——衆愚の幻想『村岡伊平治伝』」

(岡野幸江、長谷川啓、渡邊澄子共編『買売春と日本文学』東京
堂出版、二〇〇二年、一二六頁)

(40) 前掲「岸田國士『牛山ホテル』の方言について」

※引用文における旧字体は新字体に改めた。